

独り歩き

——ある古い山日記より——



横 田 守

信州に郷里をもつHさんと穂高に行ったのは、六年も前の夏でした。西穂山荘に一泊し、奥穂から前穂、岳沢と上高地の宿に着いたときには、長い夏の日もとつぷりと暮れていた。

〃男伊達なら西から奥へ

縦走してみろ娘やろ〃

「安曇節」にはこんな文句もありますが、この縦走路は、穂高の中でも比較的しんどいコースだそうです。

生まれてはじめての、しかも山路といえは新島先生の若王子山頂に登った程度の私にとつては、いささか苦しい山歩きであった。

西穂高岳から天狗のコル、ジャンダルムと続く西穂の稜線は、全体が、赤茶けた巨岩のかさなりあつた岩山と、もうい崩れやすい逆層の路で、岳沢側も飛驒側も急峻な岩壁になつてゐる。夏も八月をすぎると雪溪の雪も消え、水を求めるところなど全然なく、私は途中渴きと疲労とで、「もう二度と再び山なんかに来るもんか」と歯をくいしばりながら歩いたこと憶えております。

.....

独りで、二度目に山行きを思ひ出したのは、

それから三年たった三十七年の秋でした。

九月三十日の夜、急行^{しほ}々ちくま^まで京都を発ち、松本より島々^{しま}を経て上高地に入った。

梓川沿いの楓は紅葉にはまだ早いようでしたが、三年ぶりに見る穂高の山嶺が、古い恋人のように無性に懐かしく「本当に来てよかった」と自分にいきかせたものです。

アルプスの秋は、訪れる人も少なく、上高地の林の道も静かな自然の姿をとりもどしていた。

歌人、若山牧水が、大正十年の秋、徒歩で白骨温泉を経て上高地を訪れたときの紀行文がありますが、その中でつぎのようにその印象を記しております。

「これほど大きく美しく、そして静かな寂しい眺めにまたと再び出合うことがあろうか、これはいつそ飛驒に越す予定を捨ててここに四、五日を過ごして行こう、そのためにどれだけ自分の靈魂が浄められることであろう。ということを一途になつて考え始めていたのであった。

いわけなく涙ぞくだるあめつちの

斯^なるながめにめぐりあいつつ」

牧水をして涙ぐませた感動は、今もなお、

梓川のほとりにたたずむ人々の心と同じように迫つてまいります。

小梨平から徳沢までの梓川沿いの道は、散歩路といつてよいほどの平坦な道が続いております。徳沢園の前の芝生で、やや早い昼食をとつた。このあたり、上高地が^く神河内^くといわれていたころには牧場があつたとか、上高地の騒音をきいて、家族づれでのんびりと散策するのに適したところだす。

徳沢をすぎると、行きかう人もほとんどなく、独り歩きの自分がいささか心細くなつてきた。

新村^{しんむら}橋という吊橋を渡り、穂荊新道を溯つて行くつもりだった私は、橋の四分の三ぐらいのところまできて本当にヒヤリとした。狭い、相当地にゆれる吊橋をやつとのおもいで渡りきろうとした寸前のところで、橋がぶつたりと切れていたのです。切れ目は一メートル足らずのもので、思いきつて飛び移れば渡れそうな気もしましたが、どうも独り歩きというものは臆病になるものです。

昭和十一年一月、槍の北鎌尾根で逝つた単独登行者、加藤文太郎が、「単独行について」という一文の中にもつぎのように記しており

ます。

「……彼（単独行者）の臆病な心は彼に僅かでも危険だと思はれるところはさげさせ、石橋をたたいて渡らせたのであろう。彼はどれほど長いあいだ平凡な道を歩きつづけてきたことか、また、どれほど多くの峠を越してきたことか、そして長い長い忍従の夜路を経てついに山の頂きへと登つて行つたに違いない……かくの如く単独行者は夏の山から春秋、冬へと一歩一歩確実に足場をふみかためて進み、いささかの飛躍をもなさない。故に飛躍をともしなわなないところの（単独行）こそ最も危険が少ないのではないか。」

山歩きにかぎらず、案外、こういう、人生の単独行者というものが多いいのではないでしようか、飛躍をともしなわなない、平凡な道をただ、もくもくと生きて行くという……でもそれはそれでいいのではないかと思います。ただ、一つだけ言えることは、単独行者といえども、山に登るからには、多少とも生命^{いのち}がけのはずです、どっちみち最後はどつかで賭けなければならぬ。私たちの生活にもきつとそういう時があると思います。

結局、私は吊橋を渡らないで、梓川の左岸

に沿って横尾谷より涸沢に入り、涸沢の朋文堂ヒュッテに辿りついたのはもう五時をまわっていた。残照に映える涸沢の雑木が、紅葉で真っ赤にもえておりました。

翌十月二日、早朝より風強く、霧が深かった。北穂の頂上より鳥も通わぬといわれる「滝谷」の懸崖を見るのが、この山旅の目的だったのですが、予定を変えて真っすぐ白出沢から蒲田に下ることにした。涸沢からザイテングラードのハイマツの道を、とぼとぼと登って行くころには、もうすっかり深い霧につつまれてしまい、前穂北尾根のあたりであろうか、時折落石の音のみが、不気味に涸沢の圏谷にこだましておりました。

穂高岳山荘にて小憩、霧はいよいよ深く、小雨まじりの風が小屋の戸をはげしく打ちはじめていた。「これはえらいことになったわい」と心中、悲愴な気持だったのですが、これも一つの試験だと心にきめ、霧と雨の吹き上げてくる白出のガラ場を、やみくもに下って行った。

「白出沢」は、奥穂高と涸沢岳のザッテルを源とするもので、水の通路というよりも雪と岩のなだれの通路といったほうが適当なガラ

場で、裏穂高独特の陰うつな感じの谷である。

白出沢に入ってから、柳谷の出合まで約六時間、私はだれにもあわなかった。

柳谷の溪流で、京都の学生に出合ったときは本当にうれしかった。常念から槍、穂高、白出沢と約一週間を独りで歩いてきたという彼は、髭面の中から真っ白い歯をみせて、十年の知己のように笑ってくれた。

おそらく、この日、白出沢を通ったのは、私たちだけだったでしょう。

「すばらしい山の湯があるんですが、泊っていきませんか」

彼のすすめるまま、新穂高温泉の中崎山荘に一泊し、高山を経て京都に帰った。

.....

それから一年たった、十月七日、私はまた、独り秋の穂高を訪れた。

西穂から蒲田川へ、霜柱の道は、踏み人もなく、静かであった。ナナカマドの梢も、すっかり葉をおとし、真紅の実が、コバルトブルーの空を背景にして鮮かであった。

新穂高温泉の中崎山荘は、信州から、お手伝いに来たという娘さんが一人増えただけ

で、一年前と少しも変わっていなかった。みそ汁の味も、山菜の色どりも、あいかわらず、いかにも奥飛騨の秋の味であった。

私は、この日、西穂高岳をのぞむ、小鍋谷で、初老のご夫婦にあった。冬の西穂で、遭難したという息子さんのために、毎年こうやって花を供えに来ているという。

「子供が生きている頃は、なんで辛い思いをしてまで、山なんかに登るんだろうと、随分叱ったりもしたんですけど、こうやって、何べんとなく来ておりますと、子供の心が、わかるような気がします。でもね……」と多くを言わず、あとの言葉をのみこんでしまわれた。

.....

あの日から一年たつたいま、私は、もう一度、穂高の山稜を見、雲を見たいと思う。そして、誰もいない岩尾根で、おのれの勇気のためし、体力の限界をためし、もう一度、おのれの意地をみつめながら、飛躍をとまなわない、平凡な道を、とぼと歩みつづけた。い。

(商高教諭・商業)

吉田悦蔵氏と同志社

湯 浅 八 郎

近江兄弟社は吉田悦蔵著「近江の兄弟」によつて周知の如く御撰理の下、特選され聖別せられた宣教師ウキリヤム・ヴォーリズ先生（一柳米来留）を中心に宣教とビジネスとが直結されて、滋賀県下に深く根を下したキリスト教共同体である。小林ライオン齒磨、長瀬花王石嶮、五十嵐白洋、後藤オリジン等々の如く、わが国の実業界においてキリスト者による事業が成功した実例の一つである。主としてメンソレータムで知られた近江兄弟社のビジネス・リーダーは吉田悦蔵氏であった。日本人としては実に堂々たる体格と福々しい容貌の持主であつた吉田氏は、巾の広い応接なキリスト者らしい温い人間味と明敏なビジネス・センス豊かな企劃性とを具えていた。

この吉田氏が同志社の社友に就任して学園を軍部の弾圧から防衛するために尽瘁せられたのは主として私の総長時代からであつた。

この時代はわが国が軍部独裁の絶対的軍国

日本となる前夜であつた。その準備工作として露骨な軍国主義が国体明徴運動のかたちで官公私の諸学園にのしかかつてきた時代であつた。愚劣險悪な右翼が恐喝迫害を恣いままにした時代であつた。そして最も遺憾であつたのはこのような母校の危機に際して動機の如何に関らず外部の軍部や右翼と相通じて暗躍し画策した教授達が学内に存在した事実である。また善意はあり母校愛をもちながら世の中の実情にはうといといわなければならぬ人々が得手して実行不可能な正論や書生論や、ときには主観一辺倒の感情論をふりかざして学園の責任者をむしろ簡単に批判、攻撃するに急であつて、いよいよその立場を苦しめた時代であつた。

吉田氏はこのような現実をすっかり見貫いていた。そして未熟で柔軟性を欠き緊張そのものであつた総長を助けて、このような変質無規定な時代に、一方キリスト教主義の神隨

を裏きらず、しかも他方いたづらに実力を横領していた軍部との正面衝突を避けるため苦心し奔走されたのであつた。これは操守すべき本質的なものは飽くまでもこれを操守しながら、妥協してさしつかえないものや妥協すべきことがらについては誤解や批難を覚悟の上で妥協も辞せられなかつたのである。

この妥協の一例として同志社幹部の伊勢神宮参拝が挙げられよう。これは空前絶後の変態的なエピソードであつた。同志社が外国人の支配下にある反祖国、非愛国主義の学園では無いことを——そのような偏見や邪推をとりあげるだけでも馬鹿らしい限りであるが、その頃の日本はそれほど愚劣低級な連中がわが世の春をうたい上げていた——わからぬ連中にわからせることが必要であつたのである。その一手段として吉田氏が計画されたのが伊勢参拝であつた。多分昭和十二年の秋のことであつたらう。私も一行に加わつたが、上谷統理事、吉田、ヴォーリズ各社友、奥村竜三、浅野恵二両部長、山下杉磨顧問弁護士などは多くはシルクハットにモーニングという正装であつたと記憶する。そして大廟の正面で宮司をして祝詞をあげさせたのである。

勿論みそはその祝詞であつた。今日その祝詞が残存しないのは誠に遺憾千万であるが、それは極めて慎重に用意せられたものであつた。一応祝詞らしい修辭でつづられたこの作文は、同志社はキリストの眞精神によつて祖国日本を救はんことを悲願とする良心的人物を養成する最も正しい意味で愛國的学園である。われらは今ここに立つて天地の大御神の守護と祝福とを祈願し奉るという主旨のものであつたと思う。

最近私は吉田氏令嗣希夫氏の厚意で恐らく昭和十四、五年の頃吉田理事が大同志社の現情批判と将来の拡充方針とを書きのこされた文書を見ることができた。クリスチャン・ビジネスマンであつた同氏の構想は時代的表現の背後に、学債による千万円の基金とか、財閥とのタイアップとか、国庫補助とか、大胆で積極的なものである。わが国のキリスト教会が産んだ代表的レイ・リーダーの一人、同志社の有力な父兄であり理事であつた吉田氏のこの文書は、母校の愛難史上可也興味のあつた資料であるといえよう。ここに原文のままこれを紹介する。

(同志社評議員会議長)

大同志社学園の将来を想ふ

吉田悦藏

新島襄先生の精神は要するにキリストの眞精神であつて基督教と言ふ教となり、教派となり信条となつた。欧米各国の着色ある形式を衣とする宗教でなく天地宇宙の純正なる八紘一字の大日本帝國暨國の大精神と同源同流なる天の父の心に他ならないのである。

大同志社学園は皇國青年男女を以て最良最善なる日本帝國臣民たらしめんため宇宙の眞理によつて陶冶教養することを唯一の目標とすべきであり、國の眼目となり太柱たる人材を作り出すを以て目的とするのである。

今や創立以來六十有余年五千の學生と幾百の教師を有し、学園の財産も亦數百万円を以て數ふに至つた。学園は人と財の運用によつて或は進み或は退く、学園創立の大理想をかざし以て現今の狀態を判斷すれば左の如き諸点が注目しと想われる。

一 一 大学園なれど校舎の設備に於て著しく貧弱なり

二 学園の財政は極めて消極的にして殆んど借入金なし

三 教授中に有力なる人材不足しては居ないであらうか、博士達の数は暁の星の如きではないか

四 学園の組織に就て見れば理事会なる統治機關と学園の教職の間に渾一に同心一体学園の運用に當らんとする協力が不便に出来て居る

五 校友会や同窓会(女子部は校友会のこと)を同窓会と稱して居る)社友、評議員の制度があつても要するに学園の理事会や特に常務理事会と本部とにいろいろ利用指導されて大して学園經營に実力がない様子である

六 学園に對する大口の支援者が無い未だ一人で五十万、百万の金を寄附した例のない貧弱な卒業生や父兄のみの様に見へる学園に全日本的にリーダーとして立つ人格者が無い

八 運動、音楽の方面も亦貧弱にして地方私立大学のレベルの上に出て居ない

九 工科、医科、農科等の自然科学方面に對する学園の進展方向の無いのは淋しいと言ふの外ない、故にユニヴァシチーと稱するに相當の距離あるを知るのである

十 図書館にしても諸設備にしても時代遅れである

十一 教授達の給与も待遇も官立大学より劣って居ないだらうか

十二 政府の待遇は官立大学と比較にならぬ程薄い

十三 私立学園として私立に徹する肚が無い様である

十四 学園の経営が教授にも学生にも秘密的に見へる

十五 学園のニュース新聞が貧弱である

十六 父兄等の教育に就ての関心が盛んに顯れて居ないので淋しい

十七 各学校（学園に九個の学校がある）の校長が充分に手腕を発揮する様になって居ない、各学校の独立を恐れてか大同一致フェデレーション式の統一学園になって居ない為に本部の威礼（令にあらず）も行き届かず、又各学校の統一したその学校限りの特色を発揮する事にも不便の様である

其他気のつくこと多々ありと言ふべきであるが、まづ観測記として以上二十近くを考へて見て、さて将来に対する立案に移ることに

する。

◎立案

一 学園の統治と経営に就て広く公論を起し財政の公開をなし常に教授、学生、父兄、校友に学園の実情を披歴して大なる援助を頼むこと

二 学園新聞を月二回位出して学園の進展の爲め有力なる言論を起し実情ニュースを建設的に編輯発表すること

三 大同志社学園を五十年、百年見通す計画を立つること

四 人材を如何にして動員し、教育的にそのベストを尽さしむるか、教授達の向上、研究の奨励保護について万全を期すること

五 少くも壹千万円の金力を生み出し、名実共に大学を確立し各学校を日本に於ける最高学府たらしむること

六 来るべき五十年を一期として計算するに同志社の校門をくぐり三年乃至十年の年月を学園に生活する学生、毎年一千人づつ入れ換るものと見れば学生五万人を数へることを得べし、更に教授、職員を計上すれば更に壹万人を加へ合計六万人と

仮定しその全員に対し一人当り金二百円の学校債を引受けて貰へば金壹千二百万円を得ることになるべし

七 学校債は愛校精神の顯はれとし無利息とし生活に絶対に必要な限りは永く所持して貰つて置くこと、所得者が衣食に窮する程の場合は適当に返金する途を開くも可なり

八 学生一人当り金二百円なれば之を平均五年存学するものとすれば一年四十円の学債応募額でありあまり無理ではないと思はれる

九 長期の計算を基礎として百万の富を管理する生命保険相互会や特別な公益財団より学園に必要なだけ金一千万円を限度として低利にて借り入るること

十 日本の財閥中大学に手を延ばさんとするものあれば大に合流を辭せざること

十一 大学は天下の公器なれば政府を動かして具體的に多大の援助を為さしむるに何の遠慮もなきこと

十二 かくして徹底的に改造し新設計の下に名実共に雄大なる学園を作ること